

被服製作学習への意識と自己効力感の関連 大学生の調査による考察

扇澤美千子*・川端 博子**

はじめに

日常私たちが着用する被服の大部分は既製服であり、自分の手であるいは家族が被服を製作することは少なく、被服製作の技能を必要とする場面は減少した。家庭科では、学習指導要領改訂のたびに被服製作領域が削減され、中学・高等学校では被服の製作が必修とされなくなり、まつり縫いや返し縫いなど基本的な技術も定着していない大学生が多数を占めるようになってきた¹⁾。

しかし、被服製作学習では縫製技術や知識を習得するだけでなく、製作に継続して取り組む満足感、完成の喜びなど様々な体験をすることができる。高部ら²⁾は製作実習で楽しい体験をすると技術の活用、学習に対する意欲、興味が増し自信を持つ傾向があることを、大学生を対象とした調査で確認している。蛭子ら³⁾は被服製作学習の過程で着実な思考力、計画性、創造性が養われることを、中学生の調査をもとに明らかにしている。このように、家庭科の実践的・体験的学習の中でも、被服製作学習の果たす意義と役割は大きいと考える。

本研究では、継続的に積み上げる被服製作学習の意義を再検討することを目的として、大学生100名を対象に被服製作学習に対する意識（好き嫌い、思い出、学習での経験とその活用など）を調査した。その結果、大多数が肯定的な記述をしており、作ったものに愛着を感じる、完成したときはうれしかったという感想が目立った。このことから、被服製作学習は、計画・見通しを立て、失敗などを繰り返しながらも作品を完成させていく学習であり、最後まで取り組んだ末に作品が完成したときに感じる喜び、達成感などを通して自己効力感の向上につながる事が想定された。

自己効力感とは、Bandura⁴⁾が創出した概念で、ある目標に到達するために見通しをつけ、適切な行動を成し遂げられるという予期及び確信である。桜井⁵⁾をはじめとする先行研究において、自己効力感の高い人が困難な課題に直面したとき、より大きな努力を払い、より継続的にそれに取り組むことが、実証されてきた。学業に対しても、自己効力感が課題に対する努力と粘り強さに大きな影響を持つことが見出されている⁶⁾。また、学習における自己効力感が高い生徒は、学習場面において忍耐力・努力・動機づけ・内発的興味などに秀でていることも明らかとなっている⁷⁾。自己効力感が高いほど、困難に直面したときにも頑張れるといわれ、また成功・感動体験は自己効力感を高めるという報告⁸⁾がされ

*茨城キリスト教大学

**埼玉大学

ている。

本研究では、小学校・中学校・高等学校を通して授業を受けてきた大学生を対象に被服製作学習に対する意識と経験を調査し、自己効力感、および生活での実践との関連を検討した。これらをふまえ、被服製作学習がもたらす影響とその意義、実践的・体験的学習としての役割等を明らかにするとともに、被服製作学習での指導の工夫と学習活動のあり方について考察した。

注) 本研究において被服製作学習は被服に限らず布を用いたものづくり学習全体を示すものとする。

方 法

1. 調査方法

調査期間は2007年11月～2008年7月で、集合調査法、留め置き調査法による質問紙調査を行った。分析は、エス・ピー・エス・エス株式会社による統計ソフトSPSS11.01Jを用いて行った。

2. 調査対象者

調査対象者は関東地区在住の大学生490名（男205名，女285名），年齢は18歳～28歳（平均年齢20.0歳 標準偏差＝1.24）である。

3. 調査項目

調査項目には、属性3項目、自己効力感尺度⁹⁾ 17項目、被服製作学習での体験と現在の意識50項目、生活での実践7項目を設定した。

①属性に関する質問

調査対象者の基本的な属性を知るために「性別」，「年齢」，「所属」（3大学7学科）に関する3項目の質問を設定した。

②自己効力感に関する質問

自己効力感を測定するため、Shererら¹⁰⁾ が提唱した「特性的自己効力感尺度」を邦訳し日本人のコミュニティサンプルに適用した成田ら¹¹⁾ の研究を参考に、一般的な自己効力感に関する17項目（社会的自己効力感に関する6項目を除く）を設定した。17項目それぞれについて、「あなた自身の考えや行動に、どの程度当てはまりますか。」と質問した。回答方法は、「そう思う（5点）」「ややそう思う（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「そう思わない（1点）」の中から当てはまるものを一つ選択する方式とした。

③被服製作学習での体験と現在の意識と自己の能力に対する評価に関する質問

調査対象者が小・中・高等学校でどのような思いで被服製作学習を受け、現在どのような思いでいるかなど被服製作学習での体験と現在の意識を明らかにするために、以下の項目を設定した。好き嫌いの程度（2項目）、意欲・関心について（5項目）、被服製作学習から受けた成功・感動体験（7項目）あるいは精神的苦痛に関する質問（7項目）、被服製作学習に対する肯定感または否定感についての質問を合計33項目設定した。

その他、自分の能力・特性や手先の器用さなど自己評価の質問を17項目設定した。

回答は「あなた自身の考えや行動に、どの程度当てはまりますか。」という質問を行い、「そう思う（4点）」「ややそう思う（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「そう思わない（1点）」の中から当てはまるものを一つ選択する形式とした。

④生活での実践

調査対象者が学校の授業以外でどの程度の自作経験があるか、被服製作学習で習得した技術や技能が実生活の中でどのように活用・実践されているのかを明らかにするために、家庭科の学習内容をふまえて生活での実践に関する質問7項目を設定した。質問は「あなたは生活の中で自主的に行ったことがありますか」で、回答は「ある（2点）」「ない（1点）」から選択する方式とした。

結果と考察

1. 被服製作学習と被服製作への意識

被服製作学習での体験と被服製作への現在の意識に関する調査結果から、男女別に平均値を算出し、総平均値の高い順に示した。（表1）「作品が完成すると、達成感が得られる」「手作りの品は暖かさを感じられる」など成功・感動体験や心理的にプラスとなる項目と「基礎的技術を学べる」「被服製作学習は生活に役立つ」など実用面の項目が高い値を示した。一方、「居残り作業をさせられる」「やってもできないからつらい」などの否定的な意

表1 衣服製作への意識（男女別平均値）

	合 計		男	女
	平均値	SD	平均値	平均値
作品が完成すると、達成感が得られる	3.48	0.71	3.26	3.64
基礎的技術を学べる	3.41	0.68	3.14	3.61
根気のいる作業である	3.39	0.72	3.33	3.42
被服製作実習は生活に役立つ	3.35	0.71	3.11	3.53
手作りの品は人の暖かさを感じられる	3.32	0.76	3.18	3.43
自分の力で仕上げることで、自信がつく	3.26	0.82	2.95	3.48
誰かの為に作るということはいい	3.24	0.82	3.07	3.36
作ったものに愛着を感じる	3.19	0.86	2.94	3.37
嫌いでも続けていると、やがて上手になる	3.10	0.77	2.98	3.19
友達と教え合えるから楽しい	3.03	0.83	2.82	3.19
製作中は無心になれる	3.01	0.96	2.65	3.26
うまくできないとイライラする	2.99	0.91	3.02	2.96
布の扱い方や性質が分かるようになる	2.96	0.82	2.75	3.11
自分で工夫する力を養うのに役立つ	2.94	0.80	2.81	3.04
布を使って、小物や洋服をまた作りたい	2.81	1.04	2.23	3.22
既製品を購入するほうがよい	2.76	1.27	3.02	2.58
作品が出来上がっても、使う機会がない	2.76	0.93	2.90	2.66
作業が面倒くさい	2.67	0.92	2.87	2.53
ミシンの操作方法が難しい	2.66	1.00	2.57	2.72
被服製作実習は苦手である	2.59	1.06	2.82	2.42
作業が遅く、周りに置いていかれる	2.40	0.99	2.50	2.33
やってもできないからつらい	2.10	0.90	2.22	2.02
居残り作業をさせられる	2.07	0.97	2.16	2.01

識や苦痛を示す項目は、低い値であった。男女間で比較すると、肯定感を示す内容ではいずれも女子の方が男子より高い値を示したが、苦手、面倒など否定的な意識は、男子の方が高い値となった。しかし、全体としては被服製作の体験はおおむね肯定的に受け入れられ、心理的にも実用面でも被服製作学習を通して得られるものがあると考えている。

2. 被服製作学習の好き・嫌い

ここでは、小学校と中学・高等学校の2期に分けて被服製作学習に対する「好き・嫌い」の意識について検討した。図1は、「中学・高校での被服製作学習は好きでしたか」の問いに対する「好きだった」「やや好きだった」「あまり好きでなかった」「好きでなかった」の4つの選択肢の割合を集計した結果である。中学・高等学校段階での被服製作学習を「やや好き・好き」とする者は全体の7割であり、女子で「好き」とする割合は、 χ^2 検定で男子より有意 ($p < 0.01$) に高い傾向を示した。

中・高等学校時は小学校段階より被服製作学習を「好き」とする割合は低下する。しかし、両者には高い相関 ($r = 0.85$) がみられ、小学校時での体験が中・高等学校時の被服製作学習への意識に大きく影響することが示唆され、楽しい体験が学習への好ましさにつながることを確認された。これ以降の分析では、中学・高校での意識を元に「やや好き・好き」と回答した者を「好き群」、「あまり好きでない、好きでない」と回答した者を「嫌い群」として比較していく。

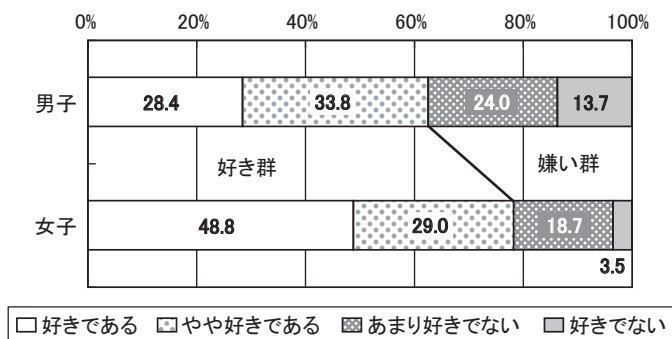


図1 被服製作学習に対する好き・嫌いの意識

3. 被服製作学習の好き・嫌いと被服製作への意識、成功・感動体験、生活での実践の関係

①被服製作学習の好き・嫌いと被服製作への意識

図2は、被服製作への意識に対する得点の平均値を、「好き群」と「嫌い群」で比較したものである。多くの項目で、「嫌い群」は得点が低く否定的で、「布を使って、小物や洋服をまた作りたい」とは考えていない。「被服製作学習は苦手である」「作業が面倒である」「作業が遅く周りに置いていかれる」などでは値が高くマイナスの評価をしており、「好き群」との差も大きい。つまり、学習に対しての意識が好意的である場合、被服製作への肯定感も高いことがうかがえる。

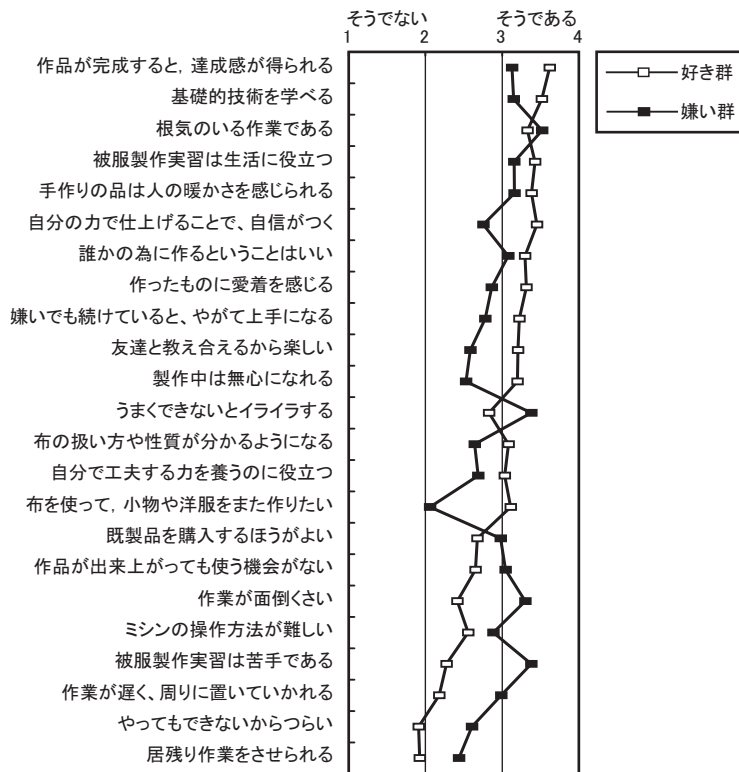


図2 被服製作への意識（「好き群」・「嫌い群」の比較）

②被服製作学習の好き・嫌いと成功・感動体験

図3は成功・感動体験に関する回答を「好き群」「嫌い群」で比較したものである。「ほめられて嬉しかった」「完成した時は嬉しかった」などすべての項目で、「好き群」は「嫌い群」より高い値で肯定的な傾向が認められた。しかし、「嫌い群」は成功や喜びなどの好ましい経験が少ないことが明らかになった。このことは被服製作学習への意欲の低下や苦手意識に結びつくと考えられる。

③被服製作学習の好き・嫌いと生活での実践について

図4は、被服製作学習に対する好き・嫌いの意識と日常生活での自作経験について、「経験あり」の割合をまとめたものである。「好き群」は全ての項目で「経験あり」の割合が高い。ボタン付け、布による小物づくり、縫い目のほつれ直しなどは家庭科の授業で取り上げている内容であり、高森ら¹²⁾が示したように、被服製作学習の好き・嫌いの意識や学習体験がその後の日常生活での実践や応用の機会に影響していることが示唆された。

このように、好き・嫌いの意識は、被服製作に対する肯定感・否定感との関連性が認められ、「好き群」においては「嫌い群」に比べて被服製作への肯定感が高く、学習体験が成功・感動体験と結びつき、生活の中での衣服の補修や自作に対しても積極的な取り組み

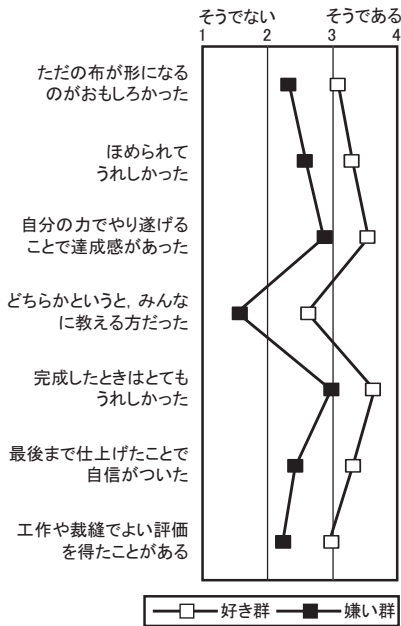


図3 成功・感動体験(「好き群」・「嫌い群」の比較)

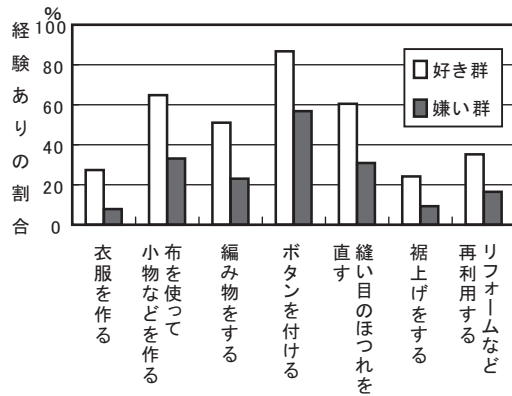


図4 好き・嫌いの意識と生活での実践の有無

が見られた。これは、高部ら²⁾が製作実習で楽しい体験をすると技術の活用、意欲、興味を引き出すことにつながるとした結果と一致している。

4. 自己効力感と被服製作および学習への意識

①自己効力感総合点とその分布について

今回使用した自己効力感尺度は、「何かを終える前に諦めてしまう」「困難に出会うのを避ける」など17項目からなるが、調査者全体としては「初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける」「失敗すると一生懸命やろうと思う」「面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる」の順に平均点が高かった。男女別平均値間のt検定の結果、「何かを終える前にあきらめてしまう」「何かをしようと思ったら、すぐにとりかかる」の2項目では有意差 ($p < 0.05$) が認められたが総合得点では男女間に差は見られなかった。反転項目では数値を逆にカウントして算出した17項目の総合点は男女とも正規分布(図5)となり、最低18点～最高79点で平均値53点、標準偏差10点となった。そこで、男女一括で総合点による群分類を採用し、自己効力感とその他の項目との関連について検討していく。群は自己効力感総合点の平均値±標準偏差 (σ) から、自己効力感低位群 (42点以下: $n=84$)、自己効力感高位群 (64点以上: $n=81$)、中間を自己効力感中位群 ($n=321$)、に分類し、以下の検討に入る。

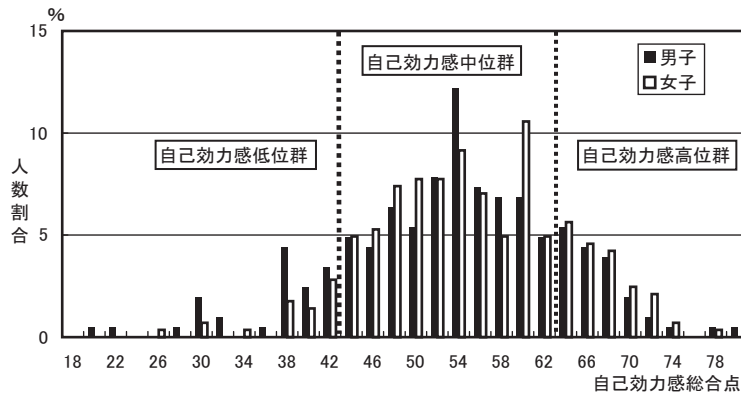


図5 自己効力感とその総合点分布

②自己効力感3群と被服製作への意識

自己効力感と被服製作への意識を男女別に分析すると同様の傾向となったため、男女一括で考察していく。

まず、被服製作への意識に関する項目の平均値を自己効力感の3群で比較すると(図6),「自己効力感高位群」・「自己効力感低位群」の示す傾向と被服製作の「好き・嫌い群」で得られた傾向と類似性が高く、成功感動体験についても同様の結果となった。つまり、自己効力感が高いほど被服製作学習に対して肯定的で学習や生活での実践に取り組む意欲は高いことが示された。佐伯ら⁸⁾は先行研究において、「児童期の成功・感動体験が自己効力感の向上に影響を与える」としているが、今回の調査から、被服製作学習での成功・感動体験を通して自己効力感の向上がなされるという可能性が示唆された。

③自己効力感の分類と好き・嫌い群の関係

次に、自己効力感による分類を被服製作学習好き・嫌い群の分類と関連させて解析した結果を示す。図7の示すように、自己効力感が高いグループには「好き群」の割合が高いが、自己効力感が低くても、被服製作学習を好きと回答する者も半数近くにのぼることが明らかとなった。自己効力感が高く被服製作学習が好きと回答した者は積極的に授業に取り組み楽しく学習してきたことが予想される。そこで、自己効力感の高低と学習の好き嫌いの4群を取り上げ、それぞれの特性を踏まえた指導のあり方と課題設定について考察していく。以降は全部で6分類のうち特徴的な4群を取り上げて分析していく。

④自己効力感4分類と成功・感動体験

図8は自己効力感4分類の成功・感動体験の関係を検討した結果である。自己効力感が高く学習を好きとする者は、すべての項目で最も高い平均値を示した。その次に、自己効力感が低く学習好きと自己効力感が高く学習嫌いとする者の平均値が高く、両者は、概ね一致した傾向を示した。自己効力感の高低に関わらず、「ほめられて嬉しかった」「よい評価を受けた」では学習好き群の値が高かった。

また、学習が嫌いであっても自己効力感が高ければ、「完成したときはうれしかった」「自

分の力でやり遂げることで達成感があつた」の値が高く、できる確信を抱いて頑張り達成感を得ており、学習の中で褒められる、高い評価を受けるなどプラスの体験が得られれば好きとなりうると考えられる。

しかし、自己効力感が低くかつ学習が嫌いの者では、いずれの回答でも成功・感動経験が低いことが示された。

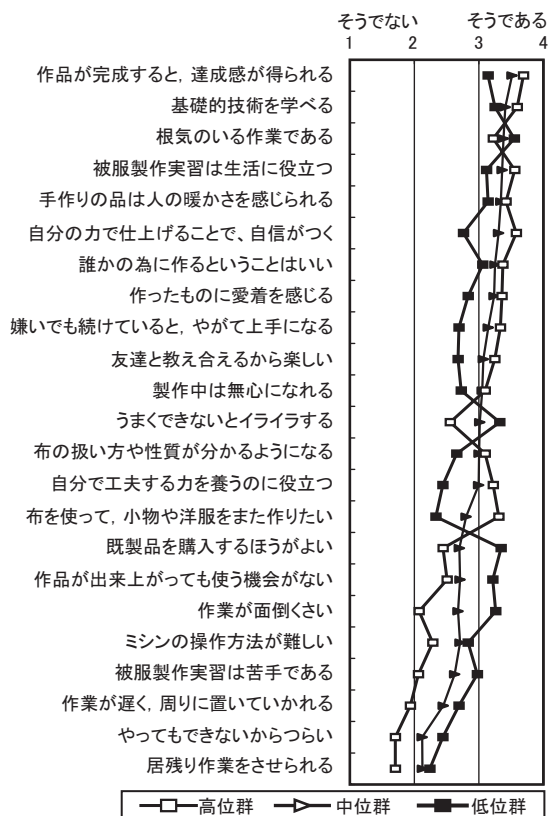


図6 自己効力感と被服製作に対する意識

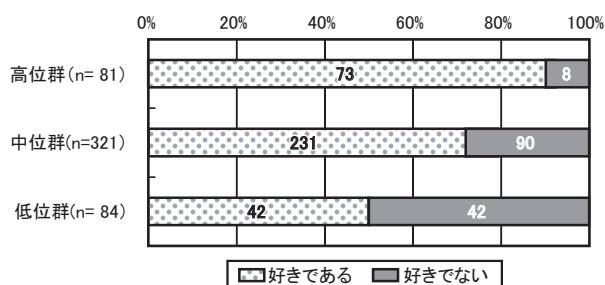


図7 自己効力感と好き・嫌いの意識

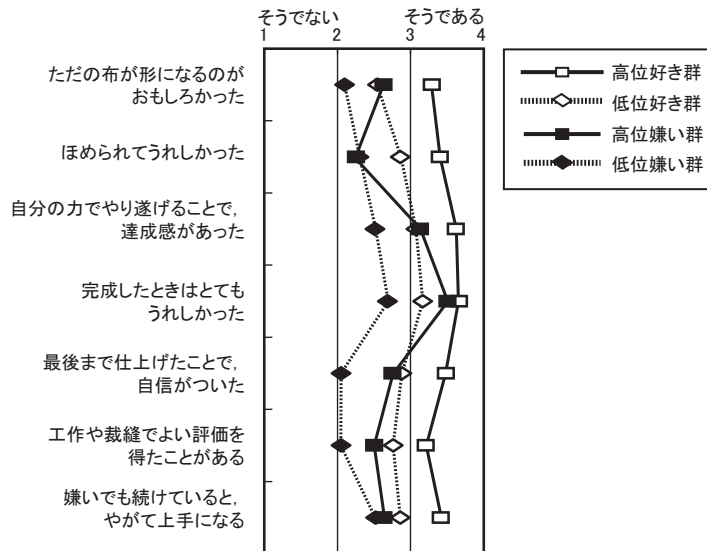


図8 自己効力感4分類と成功・感動体験

⑤自己効力感4分類と被服製作学習への意識

次に、自己効力感4分類と被服製作学習への意識について検討した結果を図9に示した。自己効力感が低くかつ嫌いの者は、被服製作学習についても、「作業が面倒」「作業が遅く、周りにおいていかれる」「根気がいる」などの作業への苦手意識が強い。また、「小物や洋服を作りたい」とは思っておらず、生活への応用や実践への意欲も低い傾向を示した。一方、自己効力感が低く学習が好き群では「根気がいる」「作業が面倒」と感じているが、居残りや作業が遅れるような経験をしていないことで苦手意識が少なく好意的に受けとめていると考えられる。つまり、自己効力感が低く学習が嫌いとする者には、課題を易しくするなど製作学習の作業が面倒と思わせず、苦手意識をもたせない指導への配慮が必要と考えられる。

自己評価を高め、困難に直面しても乗り越えられる力、ものを作る喜び、自信、達成感などを得る機会を児童・生徒に提供するためにも被服製作学習の充実は重要である。

⑥自己効力感4分類とその他の能力・特性への自己評価

図10は自己効力感4分類とその他の能力・特性への自己評価について分析した。自己効力感が高い群は勉強が好き、理解が早い、社交的などで高い値を示し、ベンザム⁷⁾が示したように自己効力感と学習場面における能力や積極性との関連性を示唆する結果となった。

また、「手先の器用さ」の評価は被服製作学習の好き・嫌いの分類で決定されており、製作学習に対して肯定的にとらえている者は手先が器用で細かい作業も得意だと感じているようである。しかし、「スポーツが好きである」に関しては自己効力感が高い群も低い群も学習嫌い群の値が高くなっており、スポーツに対する意識は製作学習と異なるものとして認識されている可能性が示唆された。

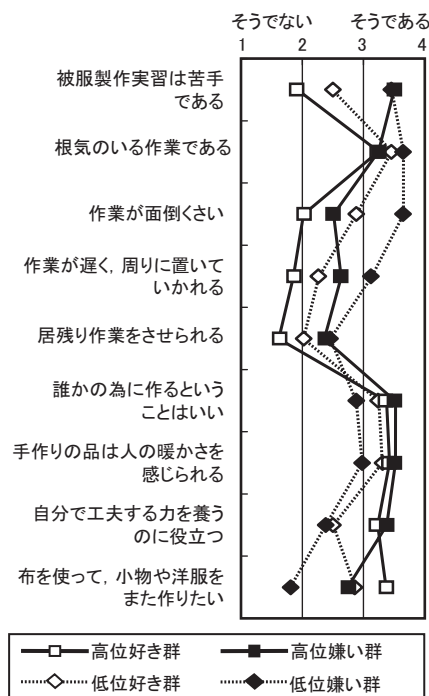


図9 自己効力感4分類と被服製作学習への意識

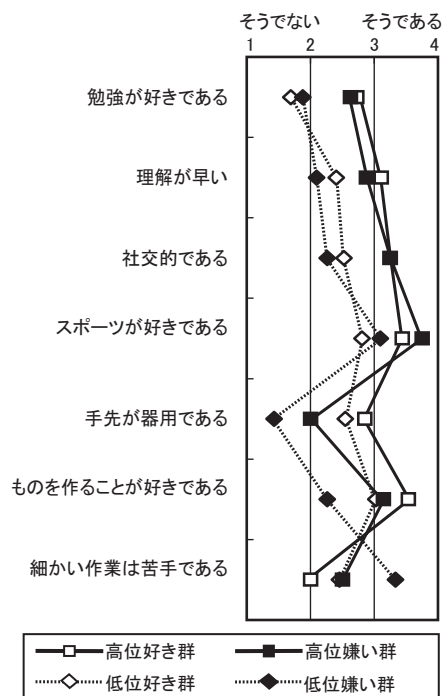


図10 自己効力感4分類と自己評価

まとめ

本研究では、小学校・中学校・高等学校で被服製作学習の授業を受けてきた大学生を対象に被服製作学習に対する経験と意識について調査し、被服製作への意識、自己効力感、および生活での実践との関連を検討した。

1. 被服製作学習に対する意識

被服製作学習に対する好き・嫌いの意識は、被服製作に対する肯定感・否定感との関連性が認められた。「好き群」においては「嫌い群」に比べて被服製作への肯定感が高く、学習体験が成功・感動体験と結びつき、生活の中での衣服の補修や自作に対しても積極的な取り組みが見られた。これは、高部ら²⁾が示した製作実習で楽しい体験をすると技術の活用、意欲、興味が増し自信を持つ傾向があることと一致しており、被服製作学習での体験を通して得られる精神的な成長が学習全般においても広い分野への興味関心を引き出し、いろいろな物事を解決していくために必要な能力の育成と関わるということがわかった。

2. 自己効力感と被服製作学習への意識

自己効力感と過去の被服製作学習の体験、そして現在の被服製作学習に対する意識の間には相互関係が見られた。自己効力感が高く被服製作学習が好きと回答した者は積極的に

授業に取り組み学習は楽しいと感じていた。一方、自己効力感が低く学習が嫌いな者は、作業への苦手意識が強く、生活への応用や実践への意欲も低い傾向を示した。自己効力感が低く学習が嫌い群には、課題を易しくして製作学習の作業が面倒と思わせず、苦手意識をもたせない配慮が必要と考えられる。

3. 被服製作学習のあり方

一つの作品を作り上げるために計画を立て、完成図を頭に描きながら作業をしていく被服製作学習では、ものを作る喜び、自分はやればできるという自信、壁に出くわしながらも一つのことをやり遂げる達成感などを感じることができる。被服製作学習は、先を見通し必要な行動を効果的に遂行し、困難に直面しても乗り越えられる力、つまり、自己効力感を養い、ものを作る喜び、自信、達成感などを得る機会を児童・生徒に提供する重要な役割を果たしているといえよう。指導者は、学習者の衣生活を豊かにするような生活に密着した課題内容を提供することはもちろん、それと同時に、学習者が技術や知識を習得するだけでなく、精神的な充実感・達成感を得られる実践・体験ができるような課題内容について検討することが重要である。

参考文献

- 1) 布施谷ら, 家政系女子短大生における手縫いの技能の実態, 日本家庭科教育学会誌 (2001) Vol. 43, 273-278
- 2) 高部ら, 家政系女子大生の被服製作に対する意識と基礎知識 (第1報), 日本家庭科教育学会誌 (1995) Vol. 37, 39-53
- 3) 蛭子ら, 中学生の被服製作に関する実態及び意識 (第1報), 日本家庭科教育学会誌 (1991) Vol. 33, 17-23
- 4) Bandura 著 本明・野口監訳 激動社会の中の自己効力, 金子書房 (1997)
- 5) 桜井茂男, 自己効力感が学業成績に及ぼす影響, 教育心理 (1987) Vol. 35, 140-145
- 6) 前田武子, 生徒支援の教育心理学, 北大路書房 (2002) 111
- 7) スーザン・ベンザム著 秋田・中島訳 授業を支える心理学 (2006) 174
- 8) 佐伯ら, 児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす影響, 九州大学心理研究 (2006) Vol. 7, 181-192
- 9) 成田ら, 特性的自己効力感尺度の検討, 教育心理学研究 (1995) Vol. 43, 306-314
- 10) Sherer, M. et al. The self-efficacy scale: Construction and validation, Psychological Reports, (1982) 51
- 11) 山本真理子編 心理測定尺度集Ⅰ 人間の内面を探る サイエンス社 37-41
- 12) 高森ら, 教員養成学部学生における手縫い技能及び被服の有効利用の実態と被服製作体験との関連性, 熊本大学教育学部紀要自然科学 (2001) Vol. 50, 79-88

The Relationship between Consciousness about the Study of Sewing and Self-efficacy Discussion Based on a Survey of University Students

Michiko Ougizawa, Hiroko Kawabata

Abstract

In this study, we investigated consciousness about learning to sew, and the practice of sewing in daily life among university students who had attended homemaking classes in elementary school, junior high school, and high school.

It was recognized that the degree to which the students liked sewing classes was related to their positive feelings about sewing; the result proved that their learning experiences led to experiences of success and of being moved.

The “likes-sewing group” showed a tendency to work on repairing and making clothes more positively in daily life, compared with the “dislikes-sewing group”.

The study of sewing is considered to provide children and students with a chance to experience the pleasure of making things with their own hands, and to acquire confidence and a feeling of accomplishment; thus it contributes to the building of self-efficacy.

The subjects who liked the study of sewing despite their low self-efficacy had experiences of success and of being moved.

The subjects who had low self-efficacy and disliked the study of sewing had a strong tendency to think that they were bad at sewing, and it is presumed that they need special consideration such as being given easy assignments.

Teachers should examine and select study contents and assignments according to the students' condition, so that they can obtain inner contentment and a feeling of accomplishment.